

受賞作品（優秀賞）

『高齢化社会をどう考えるか』

小堀 奈穂子

『高齢化社会をどう考えるか』

1. はじめに

人間の真実は醜い——だが、多くの人が他人の醜さだけでなく、自分の醜さからも目を逸らして生きている。人間は前を向いて、道徳的に生きるという肯定的な捉え方。もっと人間を否定的に、そして本質的に捉えていたら、現代の日本社会が抱えている「少子高齢化問題」はここまで深刻にならなかつたのではないか。

高齢者と定義される 65 歳以上人口は、2015 年に 3,387 万人となり、2025 年には 3,677 万人に達すると見込まれている。65 歳以上人口と 15～64 歳人口の比率をみると、1950 年には 1 人の 65 歳以上の者に対して 12.1 人の現役世代(15～64 歳の者)がいたのに対して、2015 年には 65 歳以上の者 1 人に対して現役世代 2.3 人となっている。今後、高齢化率は上昇し、現役世代の割合は低下する。2065 年には、65 歳以上の者 1 人に対して 1.3 人の現役世代となる見込みである（内閣府「高齢社会白書」）。高齢者人口の増加だけであれば社会的に問題視する必要はない。長寿はめでたいことであり、不老不死を願った始皇帝もきっと現代社会を羨むことであろう。高齢化社会が問題になるのは、高齢者を支える人口の減少である少子化問題が背後にあり、少子化問題がなければ、高齢化社会は問題にはならない。日本の少子高齢化問題に関しては、2016 年に「ニッポン一億総活躍プラン」が策定され、「希望出生率 1.8」の実現に向けての若者の雇用安定・待遇改善、多様な保育サービスの充実、働き方改革の推進、希望する教育を受けることを阻む制約の克服等の対応策が掲げられた。しかし、私はこのような政策に意味を見いだせない。現に 2017 年の子どもの出生数は 94 万 6060 人と過去最少を記録し、合計特殊出生率も 1.43 と 2 年連続で減少している。2018 年 10 月 2 日に発足した第 4 次安倍政権は「少子高齢化問題」の解決を最優先課題としているが、このことは過去の政権がこの問題の本質を見誤り、有効な解決策を打ち出せていなかったことを意味する。

男と女がセックスしないと子どもは産まれない。日本は世界一のセックスレス社会である（Durex, “Global Sex Survey Results 2005”）。しかし、少子化対策は結婚と出産と育児は結びつけていても、セックスと結びつくことはない。「公での正しい発言」を意識しすぎて、「セックス」という言葉、もしくはセックスについて真剣に議論することを避けているのではないか。人間はどのような生き物か、人間の本質を理解することで、日本の「少子高齢化問題」は解決していかなければならない。

少子化には女性の高学歴化や社会進出ばかりが問題になる。もちろん女性が社会進出すれば、キャリアのために結婚や出産を諦めることもある。しかし議論がそこに集中しすぎるあまり、何も進展していない。「安心して子どもが産める社会」や「女性が仕事と家庭を両立できる社会」を作ることよりも、もっと重要なことがある。本提言では高齢化社会において解決すべき最も重要な課題である少子化問題について主に議論していく。第 2 節で少子化になった原因について述べ、第 3 節では男と女の労働事情について言及する。第 4 節

で高齢化社会における結婚・出産・育児のあり方について述べた後に、最終節である結論にて「高齢化社会をどう考えるか」についてまとめる。

2. なぜ少子高齢化になったのか

前述したように、日本の高齢化社会は、それを支える労働人口の減少、つまり少子化問題がなければ全く問題にならない。子どもさえ沢山生まれていれば、長寿人口の増加は喜ばしいことである。内閣府は「少子化の進行は、未婚化・晩婚化の進行や第1子出産年齢の上昇、長時間労働、子育て中の孤立感や負担感が大きいことなど、様々な要因が複雑に絡み合っている」とし、「きめ細かい少子化対策を網羅的に推進することが重要である」としている。また、「行政による支援の充実に加え、結婚、妊娠、子供・子育てを大切にするという意識が社会全体で深く共有され、行動として表れることで、若い世代が結婚、妊娠・出産、子育てに対し、より前向きに考えられるようになる」（内閣府『少子化対策白書』、2018）というが、これらは表層的な分析に基づく課題解決の提案であり、このままだと少子高齢化問題は対処できない。

よく議論される少子化の原因は「女性の高学歴化や社会進出によって子どもを産まなくなったから」である。識字率と出産率の低下の因果関係を明らかにした社会学者トッド（2003）は「女性が読み書きを身につけると、受胎調整が始まる」とし、女性の識字率（教育水準）が上昇した国においては、女性の社会進出に伴い、少子化傾向になるとしている。

ここで疑問なのは、「少子化は女性の社会進出や養育コストだけが問題なのか」ということである。子どもを作るのは女性だけでは不可能で、男女がセックスをして受精する必要がある。10年前の2008年には「草食男子」という言葉が流行り、女性に対してガツガツしていない男性が増加していることが世の中に知れ渡った。しかし、これを「男性の性欲が少なくなってきた」という間違った解釈がある。性欲は人間の三大欲求の一つであり、男女ともに持っている。フランス文学者の鹿島茂（2008）は、「資本主義は欲望を満たすために発展したのではなく、面倒くさいことをしたくないために発展した」と論じているが、実際に資本主義のほとんどは、コンビニや自販機など面倒くさいことを省いてくれる方向へと動いている。それはインターネットの出現でますます拍車がかかり、意思決定も Google にお任せ、食べログで評価の高い店に行き、買い物は amazon で済ませる。コミュニケーションツールは電話よりも時間を選ばないメールが一般的になった。欲望を満たすために資本主義が発展しているなら、現代でもバブル期さながら、あれも欲しい、これも欲しいと人々は物欲全開であり、高級ブランドや自動車会社もマーケティングに苦勞していないはずだ。そして、面倒なことを省いてきた結果、男性は最後に残った究極に面倒くさい恋愛とセックスを省くようになった。

インターネットが出現する前までは、男性はセックスをするために、レストランを予約して女性に美味しいものを食べさせ、どうでもいい話や愚痴を聞き、買い物や趣味にも付き合っあけて、セックスに持ち込んでいた。『東京良い店やれる店』がベストセラーにな

ったのは1994年であり、もう24年も前の話だ。しかし、インターネットの出現によって、ネット配信や画像を簡単に手に入れられるようになり、自分で性欲を満たせるようになった男性は、女性とセックスするまでの面倒な作業を省くようになった。アダルトビデオ(AV)や成人向け雑誌も昔からあったが、それらを借りたり、買ったりするにもレジでお金を払うために人を介する必要があった。だが、AVも雑誌も人を介さずに入手可能となり、自慰行為ですべて済ませることができ、生身の女性を求めなくなった。つまり男は面倒くさい思いまでして、女性とのセックスを必要としなくなったのだ。

少子化の原因の一つは未婚・晩婚化である。実際に日本の婚姻率は多少の上下はあるものの、昭和47年をピークに右肩下がりである(図1)。日本政府は言及していないが、婚姻率の低下は男性が生身の女性とセックスする必要がなくなったことが重要な要素である。なぜなら結婚とは、日常的にセックスする相手(性欲を満たす相手)の獲得を目的としているからだ。しかし、日本の少子化対策は経済的な不安や、仕事と子育ての両立、子育てに伴う様々な負担についてばかりが問題視されて、このような不安を取り除く対策ばかりが目立つ。特に恋愛やセックスに対する言及は皆無であり、結婚については地方自治体で出会いの場を提供したり、フォーラムを開催(例:「結婚について都知事と語ろう!」)しているそうだが、結婚について都知事と語って何になるのだろうか。

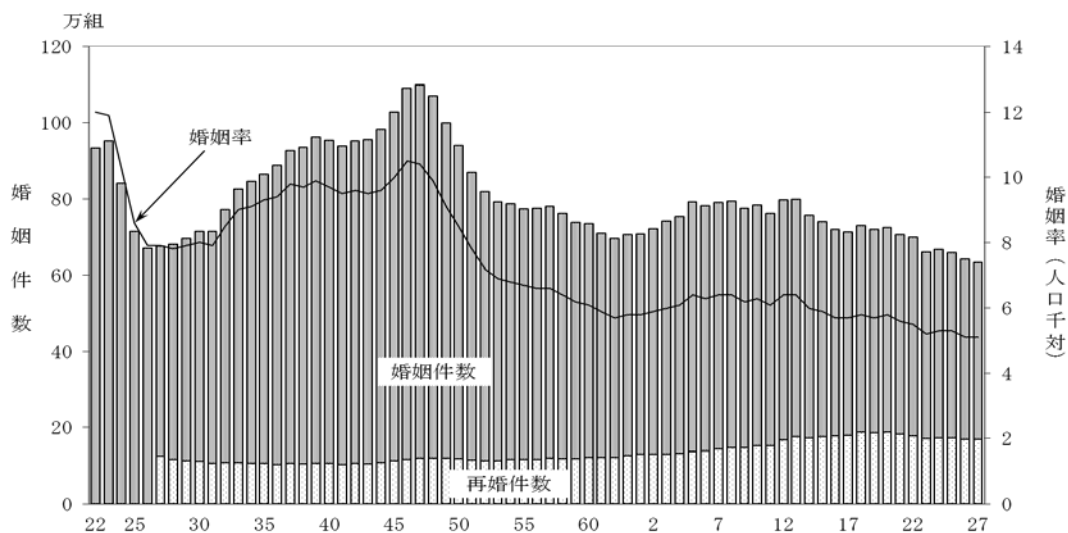


図1 婚姻件数及び婚姻率(人口千対)の年次推移 昭和22~平成27年

平成28年度 人口動態統計特殊報告「婚姻に関する統計」の概況

(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/konin16/index.html>) より 10月4日ダウンロード

3. 男と女の労働事情

3.1. 男女の賃金格差はなぜあるのか

少子高齢化による労働力人口の減少が進行する中、労働力確保のために女性の労働参加を促す「女性活躍推進法」が平成 27 年に成立した。とはいえ、男女の賃金格差は一般労働者の男性の平均賃金水準を 100.0 とすると、女性のそれは平成 25 年時点で 71.3 であり、縮小傾向であるものの、他の先進国と比較するとその格差は大きい（厚生労働省『平成 29 年賃金構造基本統計調査』）。日本の男女の賃金格差は主にその雇用形態の差や、長時間労働、職業分離、男は外、女は家という伝統的な考え方が原因であるとされている（山口、2017）。しかし、「男性優位社会」の裏側には「男性が女性とセックスしてもらうためのコストがかかったために、給料や地位を高くする必要があった」のではないか。現実には女性に対して深く一途な愛を捧げればセックスに持ち込めるかということそうではない。多くの女性は口には出さないが、いかに自分にお金をかけてくれるかで男性の誠実さを判断する。

社会では「女性は結婚や出産ですぐ会社を辞める」という差別を受けているというが、会社から一歩離れれば、男性だって差別の対象だ。男女が食事に行けば、ウェイターは男性のほうに伝票を持って行くし、女性に渡されるメニューには料理の金額が書いていないこともある。追加でワインを頼めば、男性にだけ金額を見せて了承させており、女性は金額を気にせずに美味しいワインを楽しめるようになっている。

男性が女性より賃金が高いのは、稼いだお金で女性をもてなしてセックスするためであるとすれば、インターネットの出現によって、生身の女性とセックスする必要が無くなったなら、男女の賃金格差は必要あるのだろうか。男性がセックスまでの面倒くさい行為を放棄するなら、その分、女性に男性と同等の地位、同等の給料を与えるべきである。「男は外で働き、女性は家を守る」という考えは、男性の存在意義を認めていた。女性が家族を養えるぐらいに稼いだら、男の存在意義は脅かされる。作家の桐島洋子は未婚で 3 人の子供を育てたが、このような生活が可能だったのは、彼女の家が裕福だった上に仕事もしていたからである。裕福さは人生の選択肢を広げる。女性が家族を養う分を稼げたら、家事育児は人を雇えばいいので、男性が必要なくなる。男たちは種馬になりたくないから、男性優位社会を作り出したのではないか。

ここ 20 年くらいで社会が求める「男らしさ」や「女らしさ」は大きく変化した。だが、このような社会的性差からの解放は男性のほうがむしろスピード感があるように見える。昔の男性は飲めない酒を無理にでも飲んでた。だが現代では、男だからといって大量のお酒を飲まなくても許される世の中になった。アルコール類の売上げが減少しているのは、男だからといって無理に酒を飲まなくても許される時代になったからという要素も多分にあると思える。また、男だからといって甘いものが好きでも「スイーツ男子」という言葉で、むしろ歓迎されているし、男が人前で泣いても恥ずかしくなくなった。反対に社会に出て働く女性が多くなったものの、女性の言動や嗜好はそこまで変化しない。男性と対等になりたいがために、男のような言葉使いや、水のようにお酒を飲んで、グダグダになっ

て帰ってくるような女性は昔からいたが、多くは存在していない。男性の変化が速いのは、「男性らしさ」というものが「女性らしさ」と比べて、より人工的であり、作られたものだからである。また、女性的と言われる性質は、本質的に男性の持ち物だ。男性のほうが未練がましいし、嫉妬深い。そして、脆くて弱い生き物だ。そんな彼らが会社では高い地位に就き、高い給料を取り、毎日ストレスを抱えて生きてきた。

女性の社会進出は男性が世間から押しつけられていた「男性らしさ」からの解放であると考えてはどうだろうか。女性は「弱いふり」をしながら、男性を楯に上手く生きてきた。太宰治（1947）は『男女同権』という作品で、女に散々利用され、挙げ句の果てに捨てられる男性を描き、1947年に男女平等を保障した日本国憲法の施行によって、これからは「女子は弱いなどと言わせない」と宣言しているが、女性のほうが精神的に強くて狡猾的である。女性の地位や賃金の上昇ではなく、男性の収入を低くして自由にしてあげる優しい社会。これからの時代はそんな社会が理想的だ。

これまでは「男性主導型」で恋愛・セックス・結婚が行われてきた。草食男子に対して肉食女子という言葉も流行ったが、男性がセックスまでの面倒くさい行為を放棄するならば、「女性主導型」にシフトすれば、子どもが産まれる可能性が増えるだろう。映画監督の園子温（2018）はその著書『獣でなぜ悪い』で、日本の女性像に対して「男たちの需要に応えようとして、滅茶苦茶になっている」とし、「恋愛で相手の告白を待っているだけの女性が多いのは日本だけではないか」と述べている。今までのように「男性は狩猟型で追いかけてほしいから、女性は待つだけ」ならば、待てど暮らせど男はやって来なくて、日本人は種の滅亡へまっしぐらである。男性は「やらせていただく」ためのデートを面倒くさがりはじめた。それならば、女性の孕みたい、良い遺伝子を残したいという本能にかけるしかないのではないか。その際はもう男性にデート代を負担して貰う必要もない。女性にお金が必要なことから、男女の賃金格差のある社会を日本政府は是正しなければならないし、女性は幼少期から、将来は男性と同等に働くという意識を持って、男性に頼ることを考えずに準備しなくてはならない。

3.2. 女性の労働参加はなぜ進まないか

「自由な状態にある女は、体力を要しない仕事であるかぎり、精神ないし肉体のあらゆる機能において男性を凌駕するであろう」と思想家シャルル・フーリエ（2002）は予測していた。実際に OECD 生徒の学生到達度（PISA2015）でも 15 歳児では男子よりも女子のほうが、点数が高い。日本政府は少子高齢化に伴う労働人口減少の対策として女性の労働市場への参加を促しているが、OECD の労働力参加データ（Labor Force Participation Rate）によると日本の女性労働参加率は例年ほぼ横ばいで、1990 年では 50.1%、2016 年には 50.4%とあまり効果がない。だが、平成 29 年度男女共同参画白書によれば、女性の年齢階級別労働力率を描いた「M字カーブ」は以前よりも浅くなり、M字の底となる年齢階級も上昇したという（図 2）。しかし、その多くは非正規雇用である。

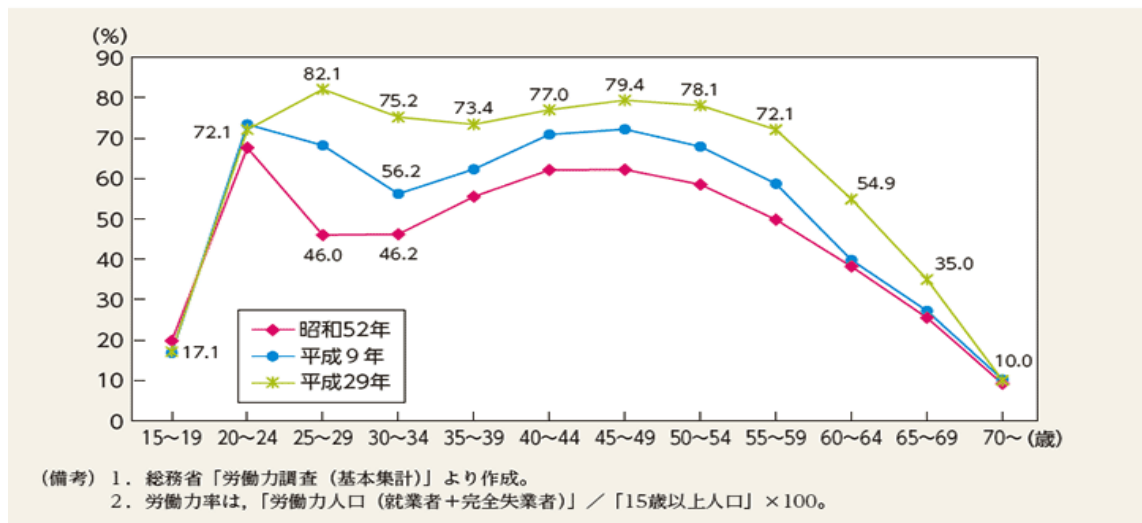


図2 女性の年齢階級別労働力率の推移

(内閣府男女共同参画局 HP <http://www.gender.go.jp/index.html> より転記)

女性の労働参加の議論は、女性が労働市場に参加したくても出産や子育てのために出来ない前提で行われているが、女性は本当に仕事がしたいのだろうか。もちろん結婚してからも働きたい女性もいるだろうが、働きたくないから結婚するという女性も多い。そうでなければ、男性の結婚率と年収に相関が見られるはずがない。

いわゆるブラック企業では、「やりがい」、「使命」などの言葉で「働くことは辛いこともあるけど、楽しいこと」のような風潮があるが、元来、労働とは他人がやりたくないことを代替するからお金が貰えるのである。男は外で働き、女性は家庭を守るという伝統を隠れ蓑にして女性はやりたくない外での労働を避け、上手く男を使いこなすように進化した。誰だって好きなことだけして、嫌なことはやらずに生きていければ最高なのだ。その究極が「引きこもり」と言われる人たちで、この多くは男性だが、女性は引きこもりたければ、結婚すれば良いし、「家事手伝い」というポジションもある。結婚の現実、愛ではなく、ある日昆虫採集に出かけたら、砂穴に落ちてしまい、気づいたら毎日砂を掻き出すために必死に働き、妻が脚本・プロデュースを手掛けるドラマを構成する一部になることだ。もともと労働力確保のための仕組まれた砂穴だと気づき、逃げだそうとはするが、実際に逃げられる時にはまた戻ってしまう。これが一般的な結婚生活であり、安部公房の『砂の女』が男性に人気があるのは、主人公に自分を投影しているからであろう。現実世界でも、自分の楽しい生活のために、旦那の家族カードで散財している主婦も多く、案外こういう夫婦のほうが上手くいっているのだが、それは妻が旦那を財布としてしか見ておらず、旦那を褒めたり、「好き」と言ってみたり、出張の時には「早く会いたい」とメールをすることが労働だと思っているのであり、そこに愛があるのかは疑問である。

結婚して仕事を辞めれば、専業主婦かパートで責任感もなく楽ができる。職場の悩みの大部分は人間関係であり、嫌な上司や同僚たちと仕事をするぐらいなら、子どもを産み、

家事をしながら家にいたいと思うのは普通である。女性が正規で働くということは精神的にかなり疲れる。仕事で認められるだけでは満たされるわけではなく、女としても認められたいと美醜についても気にしている。自分より美人が同じ職場にいれば、嫉妬して意地悪なことをする人もいるし、自分よりスキルも顔面偏差値も高い人が入社してくると、自分が中心になれないがためにその職場を去って行く人もいる。日本では「ボーイズラブ」などの男同士の恋愛を描いた作品が女性たちに人気があるが、これは日本の女性が「女性嫌悪的」だからであると小谷野敦（2012）は指摘している。実生活でも、男性が多い職場で働くキャリアウーマン的な女性と、金持ちの男性と結婚して楽しもうと考えている女性は相反するようで相通じており、女性嫌悪の傾向が強い。この傾向は多分に、女性は男性からのアプローチを待つ「男性主導型」の恋愛をしているからではないだろうか。選ばれる性は、敵が少ないほうが自分にとって好都合だから同性を疎外する。女性の労働参加や地位・賃金向上を妨げるのも、女性自身の働きたくないという意味や、女性同士の嫌悪感である可能性は否めない。

4. 恋愛・結婚・出産・育児を切り離す

4.1. 永遠の愛という幻想

少子高齢化問題は現在の「結婚制度」が崩壊寸前にあることが原因の一つであると考えられる。日本では明治時代に恋愛結婚が広まり、現在でも恋愛結婚が主流だ。だが、恋愛結婚を文字通り、「恋愛」して「結婚」する人なんて何人ぐらいいるのだろうか。先に述べたように、多くの人間は愛情が薄いのに、他人に寄りかかることばかり考えている。恋愛や愛については、日本人はアメリカからの影響を強く受けてきたが、結婚式で永遠の愛を誓うアメリカでは離婚率が高く、影響を受けた日本の離婚率はまだまだ低い。脳科学者のフィッシャー（1993）によると、生物学的にみると人間の愛は4年で終わるといふ。実際に世界の多くの国々で離婚のピークは4年目にやってくるという。確かにどんな好きな相手でも、「一生好き」だと思ふのは「瞬間的」であり、時間が経ち、毎日一緒にいれば冷めるし、飽きる。結婚しても他の異性に惹かれて付き合うことは、その人に魅力があればあるほど可能性が高くなる。そして欺く。だが、それは人間の性だし、不倫だ浮気だと騒がれるが、「永遠の愛」という現実世界に存在していないものを、あたかも存在しているように皆が信じているほうが悪い。誰かが傷ついたら、愛なんて永遠でなくてもいい。

島尾敏雄の『死の棘』は、生きながらえた「ロミオとジュリエット」の物語と言われているが、この私小説の中では、熱烈な恋におちた二人が結婚した数年後に夫は浮気をし、妻は怒りと嫉妬で気が狂って家庭が崩壊していく。これこそ人が人を愛することの真実である。たった20年前の1997年には、ダブル不倫を描いた渡辺淳一の『失楽園』が300万部のベストセラーになったが、現代では「不倫＝ゲス」と扱われてしまっている。現実世界がそんなに白黒はっきりした世界なら、文学なんて必要ないと思っていたら、人々は本当に文学の必要のない世界を作り上げてしまった。

今の日本社会は現実を直視する力が欠けており、妙に子供じみた大人が多い。嫌なことや傷つくことを避けているために、夢ばかり見ている大人がうようよいる。その究極が「永遠の愛」という美しい幻想だ。愛は永遠ではないことを知り、受け入れ、一人の人間にしがみつく見苦しい自分を直視するべきだ。そうすれば、「結婚」という形式にこだわらない男と女の新しい関係が生まれるだろう。虚構の愛の上に作られた結婚生活がそんなに良いのだろうか。男性も女性も自立して働いて、好きな人が出来たら付き合って子どもを産む。嫌になったら別れる。そのほうが愛し愛されるという関係が築けるし、子どもの数も増える。

晩婚・未婚を解決するためには、結婚に流動性を持たせたり、結婚しないで子供を産むことができる社会を作る必要がある。未婚は30代ぐらいの男女が、そろそろ子どもが欲しいと思い始めて結婚相手を探すも、適当な人がいないのが原因だ。経済力もあって、社会性もある人は皆結婚してしまっている。晩婚、未婚の問題は、品物は良い物から売れていくことであり、年齢を重ねるにしたがって残り物しかいなくなる。そして、残り物は変わり者が多い。そんな人と恋愛をして子どもを作ろうとしても無理であり、そこから未婚、未出産へとつながっていく。

一度は結婚した人たちを市場に呼び戻せば、恋愛して子どもを作る可能性も増える。ZOZOTOWN社長の前澤友作氏は婚外子3人という噂があるし、女優菊川怜の夫である穂田誉輝氏も婚外子が4人いるということでスキャンダルになったが、少子高齢化の現代では眉をひそめる行為ではなく、むしろ賞賛すべき行為である。お金や魅力のある男性は、恋愛してどんどん子どもを作るのがよい。先進国でありながら、合計特殊出生率の高いフランスは、2016年時点でも1.9を維持している。神尾（2012）によれば、フランスでは家族政策によって、結婚という形式に関わりなくカップルを作り、子どもを産み、育てることができる社会を作っている。OECDによる婚外子のデータ（Share Births of Outside Marriage, 2012）で見ると、日本の婚外子割合は2.3%であるのに対し、フランスのそれは56.7%と約6割である。フランスにはPACS（連携民事契約）という二人の人が相手の性別を問わずに結ぶ共同生活の契約もあり、婚外子の多さと関連付けられているが、「結婚しないで子どもを産むこと」への偏見がなく、日本は「子どもを産むためには結婚しなくては」という道徳的な考えや婚外子への偏見が邪魔をしているのであり、こんな考えは捨てなくてはならない。

4.2. 少子化問題解決には母系社会が理想的だ

出産と育児に関しては、どちらが負担かと言えば明らかに育児である。妊娠期間は「十月十日」で表されるとおり約10ヶ月である。その出産前後ぐらいなら、会社を休んでも自分の子どもが欲しいという女性なら多いのではないか。米国のドラマ『セックスアンドザシティ』で、主人公の友達であるシャーロットは「20代は妊娠しないかばかり気にしていたのに、30代になったら妊娠することばかり考えている」と言っている。20代は遊びたい

盛りで、結婚や子どもを作るのは後回しになる。だが、子どもを産みたくないのではなく、子育てで自分の時間を犠牲にしたくないからだ。子どもを産むだけで、育児をやらなくてよければ、多くの女性はもっと早い時期に子どもを産む。

ここまで少子化が進んでしまったら、そろそろ結婚と出産と育児は切り離すべきだ。その体制を整えるのは国ではなく、身内のサポートである。しかし、男性が育児をする「イクメン」は、上手くいくのだろうか。気が短く、単純作業が苦手な男性は家事や育児に向いていない。政府は「男性の育児休業取得促進事業（イクメンプロジェクト）」に取り組んでいるが、男性の育児休業取得率は長期的には上昇傾向にあるものの、現状では5.14%（厚生労働省『平成29年度雇用均等基本調査』）にとどまっており、育児休業をはじめとする両立支援制度を利用する男性は少ない状況である。

平安時代は母系社会であり、女性が土地の相続をして、子どもを育てるのは女性の実家の役割であった。高群逸枝（1967）によれば、日本は元来、母系社会の招婿婚であり、女が子を産む性である限り、それは自然なことだとしている。これからは平均寿命だけでなく、健康寿命も延びていく。政府は70歳定年を推進しているが、日本は世界から見ても高齢者の労働人口は多く、賃金格差さえ是正すれば、上手くいくであろう。だが、これからの社会では高齢者は子育てに従事したほうがよいのである。女性の賃金が向上した際には3世代の女性がともに生活をし、母と娘のダブルインカムによって生活を支える。そして祖母は家で子育てをするような女系家族が望ましい。そして男性とは「結婚」という形態をとらずに、その都度恋愛しては子どもを産めばいい。永遠の愛なんて存在しなから、子どもたちの父親がみんな違っていてもいい。

5. 結論

人間の正しい姿とはどんなだろうか。この疑問に坂口安吾（2000）は「欲するところを素直に欲し、厭なもの厭だと言うこと」だと言った。そして、「日本人及び日本は墮落せよ」と。多くの人は永遠の愛を求めるが、それは理想であり、愛はやがて冷めていくのが現実だ。冷めたら冷めたで、別れる時は辛く悲しいけれども、時間が経てば記憶は薄れていき、やがて新しい異性との出会いによって過去の人となっていく。私は男女の永遠の愛は信じていない。恋愛結婚といいつつも、経済力のある男を選び、自分は楽と安定を求めて結婚していく女性たちを何人も見てきた。それと同時に妻から愛されていないのではないかと悩む男性たちも。人は世間や道徳に安住することで、自分を美しくみせようとする。どうでもいい結婚という制度に縛られ、人を愛することもなく、自分で生きようともせずに。そして、自分の欲望を満たすために、なんだかんだ理由をつけて、次の世代に人生の素晴らしさを享受させることをもやめていった。これが少子高齢化の原因であり、日本政府がこれまでと同様の少子高齢化対策をしても、何も改善されないだろう。エリオット（2010）が感じた妄想した人々が雑踏する大都会—「非現実の都市」は現代の日本社会そのものだ。「死神にやられた人たち、短いため息が間をおいて、どの人もうつむいて歩いている」。死

神は資本主義で安き方向に人々を促し、他人に寄りかかることを覚えさせ、人々の意識や行動を変化させた。現代のあまりにも美化された世界もまた「荒地」なのだ。「欲するところを素直に欲し、厭なもの厭だと言うこと」。これが人間の正しい姿である。フィクションの上になら政策を立てても意味がない。人間の本質を知り、社会制度の疲労に目を向けて進むことが、少子高齢化問題には必要である。

文字数 11,233 字

図表 200 字換算×2

計 15,233 字

参考文献

Durex “Give and receive 2005 Global Sex Survey results”

OECD data <https://data.oecd.org/>

OECD “PISA 2015” <https://www.oecd.org/pisa/pisa-2015-results-in-focus.pdf>

井上たか子『フランス女性はなぜ結婚しないで子どもを産むのか』第5章 神尾真知子「フランスの家族政策と女性」勁草書房 2012年

エリオット T.S.『荒地』岩波文庫 2010年

鹿島茂・斎藤珠里『セックスレス亡国論』朝日新書 2008年

厚生労働省『平成29年度雇用均等基本調査』

厚生労働省『平成29年賃金構造基本統計調査結果の概況』

小谷野敦『日本恋愛思想史』中公新書 2012年

坂口安吾『墮落論』新潮文庫 2000年

島尾敏雄『死の棘』新潮文庫 1981年

園子温『獣でなぜ悪い』文藝春秋 2018年

太宰治『男女同権』1947年「改造」

高群逸枝『日本婚姻史／恋愛論』理論社 1967年

高群逸枝『母系制の研究』理論社 1966年

トッド・エマニュエル『帝国以後－アメリカ以降』藤原書店 2003年

内閣府『平成30年版 少子化社会対策白書』

内閣府『平成30年版高齢社会白書』

フィッシャー・ヘレン『愛はなぜ終わるのか』草思社 1993年

フリーエ・シャルル『四輪運動の理論 上』巖谷國士訳、現代思潮社 2002年

ホイチョイ・プロダクションズ『東京いい店やれる店』小学館 1994年

室生犀星『蜜のあわれ・われはうたえどもやぶれかぶれ』講談社文芸文庫 1993年

山口一男『働き方の男女不平等 理論と実証分析』日本経済新聞出版社 2017年

渡辺淳一『失樂園』講談社 1997年